

総論

満点	60点	目標得点	45点	試験時間	60分	偏差値	70
大問数	6	小問数	58				
【解答形式】		選択式	45/58問	記述式	12/58問	論述式	1/58問
【問題難易度】		C	3/58問	B	21/58問	A	34/58問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：古代・中世・近世各1題、4～6題近・現代の大問6題。小問58題の出題は変化なし。
- 2：史料問題や正誤問題中心で、記述・短い論述(3年連続)問題も配されるが、やや易化。
- 3：時代的には、例年出題の戦後史から出題されず、部門史的には、文化史の出題がやや増加。

こんな力が求められる！

- 1：戦後史(めずらしく本年度は出題されなかった)をふくむ全時代、文化史を含む全分野ないしは全部門から出題されるので、まずは弱点となる時代や分野を作らないように幅広く知識を習得すること。授業での知識習得をはじめ、テキストや教科書の精読、用語集・資料集・図説集などの閲覧を通じ、高いレベルの日本史の総合力を身につけたい。
- 2：次いで、重点を払うべき時代や出題形式としては、第一に、すでに上記したが、時代では近・現代史である。得点の半分はこの時代なので、7月期と夏期講習が履修の最初の山場、12月と冬期講習が次の山場となる。最初の山場には出題数が増加傾向の文化史も履修できるので、夏は勝負の時期、飛躍を目指したい。第二に、例年2・3題の出題があるので、史料の学習も重点領域となる。頻出史料・未見史料半々の出題であるが、未見史料でも読みやすかったり、設問に配慮があったりするので、過分に神経質になる必要はない。通常の学習のほか、資料集に親しんでおくこと、過去問の演習で大丈夫であろう。最後に、正誤問題。本年も58問中24問がこの部類に属する問題であった。解答を2つ選ばせて、ハードルを高くしてあるものも多いので、用語集などによる知識の蓄積と過去問演習は不可欠と心得ておきたい。
- 3：ハイレベルな総合力を養成するため、高3春から授業の進度にあわせ、基本から標準レベルの問題をこなしていきたい。夏休みあたりで、本学の過去問に触れる機会をもちたい。秋10月くらいからは検討を本格化させたい。Weeklyテストは80点以上、模試偏差値は62.5位を目安としたい。今年の問題をみると、高難度の問題は極めて少なくなってきた。ゼミのカリキュラムにしたがって学習を進めれば確実に合格点は取れる。

【1】

予想配点	10/60 点	時間配分の目安	6/60 分
出題分野・テーマ	文化史・古代仏教史		
出題形式	選択、正誤		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：A 問B：B 問C：A 問D：B 問E：A 問F：A 問G：A 問H：B 問I：A 問J：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：夏期文化史2回 センター：センターレベル文化史1・2回		

### ●本大問の特徴・概要

仏教伝来から、聖徳太子(厩戸皇子)による仏教興隆、南都六宗と護国仏教、平安前期の密教と神仏習合、中後期の浄土教の流行など古代の仏教史を、美術史も絡めながら、コンパクトにまとめた問題。その時代の仏教の在り方を平易にたずねるが、それだけに落としてはいけない問題。

### ●注目すべき小問

- 問B 厩戸皇子が法隆寺を建立した場所をたずねているが、空欄の正解は4の斑鳩。なぜならば、その直前に蘇我氏が飛鳥寺を建立した事実を載せており、1の飛鳥は前提になっているからである。難波に四天王寺とあって、空欄に法隆寺ならば、解答は飛鳥でよい。トリッキーな問題にひっかからないこと。
- 問D 第一に、『続日本紀』の国分寺・国分尼寺建立の詔の史料「金光明最勝王経・妙法・華経」を読み込むことで、第二次に、国分寺・国分尼寺の正式名称が、それぞれ、金光明四天王護国之寺・法華滅罪之寺であることを思い出せば正解は出せるはず。
- 問E 阿修羅像の特徴。3の6本の腕が正しい(三面六臂)。1は阿弥陀如来像ではなく、八部衆像。2は銅ではなく、乾漆像。4は筋骨たくましい憤怒の姿ではなく、少年のようなりりしい姿。5は東大寺ではなく、興福寺に収蔵。
- 問H 神仏習合の風の問題は消去法で正解の5を出せるが、総社とは、1099年から始まった旧国内の神社の祭神を一カ所に合祀した。

## 【2】

予想配点 10/60 点	時間配分の目安 8/60 分
出題分野・テーマ 政治史・対外交渉史 中世の政治と外交	
出題形式 選択、正誤	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：A 問B：A 問C：A 問D：A 問E：B 問F：B 問G：A 問H：A 問I：A 問J：B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：4月期1回，5月期3回，11月期3回，冬期対外交渉史Ⅰ2回 センター：3月②4回，4月期4回，11月2・3回，冬期対外交渉史Ⅰ2回	

### ●本大問の特徴・概要

中世鎌倉時代の以仁王の挙兵と、室町時代の第1回遣明船の国書(『善隣国宝記』)の史料を出題して、関連事項を尋ねる問題。史料は平易であり、設問も的確である。早稲田大の商学部の史料問題は多くはこのようなタイプが多いので、過去問の演習を早くから始めていいと思う。

### ●注目すべき小問

〔史料Ⅰ〕

問B 1が誤り。平清盛は安徳天皇の義父ではなく、外祖父。

問E 設問は源三位頼政の挙兵(1180.5)と同年の出来事を二つ選ぶ。2つ選ぶとなると少しきつさがますが、ここではaの安徳天皇の即位(1180.2)と平重衡による南都焼打ち(1180.12)を選ぶ。

〔史料Ⅱ〕

問F 「准三后某」すなわち足利義満の治績。

1は北山に建立といったら、花の御所ではなく鹿苑寺金閣寺。

2は、上皇の称号を辞退したのは、義満自らではなく、息子の3代將軍義持。

4は土岐頼遠ではなく、康行。

5は大内義弘(応永の乱1399)ではなく、山氏氏清になる。

問J 勘合貿易においては、4の運搬費は日本側とあるが、同費用を含め、滞在費・帰国費もふくめて明側の負担である。

## 【3】

予想配点 10/60 点	時間配分の目安 11/60 分
出題分野・テーマ 政治史 寛政の改革	
出題形式 選択、正誤	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：A 問B：B 問C：B 問D：B 問E：A 問F：B 問G：B 問H：A 問I：B 問J：B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：7月期1回、12月期1回、冬期社会経済史I3回 センター：6月3回、12月期1回、冬期社会経済史I3回	

### ●本大問の特徴・概要

寛政の改革を主導した松平定信『宇下人言』による政策の展開過程を扱った史料問題。設問部分に江戸幕府要職の人物の自伝とあり、未見史料であるものの読みやすいこともあり、設問に接しやすかったのではないかと。史料の内容は、改革開始直前の天明の打ちこわしに始まり、老中首座(・将軍補佐職)就任・儉約令、天明の大飢饉の影響下、困米・七分積金・人足寄場などの諸政策の展開を述べている。設問の特色は、一般的な問題のほか、生活史や政策に関連して少し踏み込んだ問題、センターのマクロ的な視野からなる問題からなる。

### ●注目すべき小問

- 問C 打ちこわしを起こした「かるきものども」とは身分の軽い庶民と解釈し、1の当時江戸で急速に増加した店借層を選ぶ。
- 問D 改革の風紀取締りに関する正誤問題。1の親孝行など善行者の表彰は綱吉の文治政治のほうが知られ、2の学問吟味の実施も知らない場合は、保留にまわす。誤りの度合いの強いものを選ぶのが正誤問題の鉄則であるので、寛政異学の禁の実施場所は聖堂学問所であり5の諸藩の藩学ではない、で識別する。
- 問F ホ 困米、へ 町入用、チ 無宿の三用語はその前後の史料がわかりやすいので、得点しておきたい個所である。
- 問I 人足寄場設置に関する正誤問題。1の人返し政策の一環であること、3の賃金は出所時まで積み立てられること、5の幕末まで維持されたこと、などは新たに学んだ人もいたはずである。誤りは2の寄場設置の構想は従来なかったとする点で、これは史料の読解力とも関わる問題になっており、「享保のころよりこの「チ」というものの、様々の悪業をなすが故に、その「チ」を一囲に入れ置き侍らばしかるべしなど建議あれども果さず」という一説を理解して欲しい。
- 問J 幕藩体制という支配体制の推移で各文をおさえると正解が近いはず。2は家光頃。4は吉宗、3が田沼、5が阿部正弘。1の定信の儉約令などの財政政策により財政破綻は逃れることが出来た。

## 【4】

予想点	10/60 点	時間配分の目安	10/60 分
出題分野・テーマ	政治史 若槻礼次郎の回顧にみる近・現代史		
出題形式	正誤		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：B 問B：A 問C：B 問D：A 問E：A 問F：C 問G：B 問H：B 問I：A 問J：B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：7月期4回，夏期近現代史Ⅰ・Ⅱ，12月期2・3・4回 冬期対外交渉史Ⅱ，冬期社会経済史Ⅱ センター：7月期2・3・4回，9月期1・2・3回，12月期2・3回 冬期対外交渉史Ⅱ，冬期社会経済史Ⅱ		

### ●本大問の特徴・概要

若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史 古風庵回顧録』から出題された史料問題。学生時代の旅行や日清戦後経営、第一次大戦などを材料に鉄道・貨幣・足尾鉍毒事件・福島事件・民法典論争・諸法典の整備・日清戦後経営・義和団事件・第一次大戦への参戦・「私」若槻礼次郎の履歴について正誤問題。早稲田大学に多い、2つ答え(誤っているもの)を出す正誤問題であり、未見史料でもあるが、平易な現代文でもあり、とっつきにくい問題ではない。

### ●注目すべき小問

問A 鉄道に関しては、2の日本鉄道会社が民営であることは容易に見抜きたい。4の官営の東海道線が全通するのは1889年で、同年には民営鉄道の営業距離数が官営鉄道のそれを上回るようになったことを思い出したい。学習の際は、派生事項も抑えていこう。

問C 1の足尾銅山が江戸幕府の直営鉱山(御直山)であり、維新期に払下げ(1871)、その後古河市兵衛が買収(1877)したことは覚えておきたい(年号はあまり必要ない)。1の文に誤りがあることが判明すれば、あとは2・3・4が教科書レベルで正しい文章であるので、消去法で4が誤りであることが判明する。

問D 正誤問題としては容易に解ける問題だが、1の会津三方道路の建設が山形・栃木・新潟に通じるものであるという詳細な事実まで述べた文章も配しており、このような文に動揺せず分析してほしい。

問F 民法施行に関する問題。1・2・5は少し高度な内容で可能性があるという程度で保留(実際は事実)。3は戦前の民法の特色の一つ、戸主権が強いことを知っていれば誤りであることが判明、4は難解であるが、少なくとも民法公布(全編施行)が1898年であり、第二次(1892.8~96.8)ではなく第3次伊藤博文内閣(1898.1~6)であること知っていれば正解は出せる(新商法公布は1899年第2次山県)。ちなみに、六法とは、憲法・商法・民法・民事訴訟法・刑法・刑事訴訟法をさす。

問G 1の日清戦後経営期には紡績業と鉄道業を中心に企業が勃興した。4のコンツェルン形態の経営を政府が指導したことはない。

問J 「私」が誰であるのかは、この設問で確定する。2のワシントン会議首席全権は加藤友三郎、3の金解禁時の首相は浜口雄幸。これらを除いた1・4・5の文が「私」、すなわち若槻礼次郎を指すことはさほど困難ではなく理解できる。

## 【5】

予想配点	10/60 点	時間配分の目安	10/60 分
出題分野・テーマ	政治史 明治・大正前期の憲政史		
出題形式	正誤、記述		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：A 問B：B 問C：B 問D：A 問E：A 問F：A 問G：B 問H：A 問I：A 問J：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：夏期近現代史Ⅰ 3・4・5，夏期近現代史Ⅱ 1回，12月期 3・4回 センター：夏期近現代史Ⅰ 3・4・5，夏期近現代史Ⅱ 1回，9月期 2・3・4回，12月期 2・3回		

### ●本大問の特徴・概要

I. 明治憲政史を初期議会・藩閥勢力と政党提携期・桂園時代にわけ、II. 大正前期の憲政史を主に米騒動と原内閣の時期を中心に出题した問題。テーマからも判明するように内政を中心に出题し、日清戦争をテーマとした設問でも内政との関連を抑えておきたい。前問同様、2つ答えを出す正誤問題。

### ●注目すべき小問

正誤問題で、少し問題になりそうなのが問Bと問C。

問B 上にもあげた日清戦争に関する正誤問題。5の初代台湾総督が後藤新平ではなく樺山資紀であることは容易にわかるが、1の天津条約の相互事前通告が日清戦勃発の際に実際に機能したのか、3の賠償金の使途に「その一部が軍備拡張費に充てられた」の文言の一部に惑わされた人がいるかもしれない。正誤問題は誤りをあげる場合はよりいけないものを選ぶが、その好例となるような問題。

問C 誤りの一つ、5の自由党系の憲政党の党首が大隈重信でないことは容易に選べるが、1の第3次伊藤内閣が提携を断絶されたのは進歩党ではなく、すでに実績のある自由党であることを識別することができるかどうか。さほど難問ではないので、確実に得点をあげたい。

記述問題では、問Gと問Jも確実におさえたい。

問G 寺内正毅超然内閣の成立に対して、1916年10月、前内閣与党の立憲同志会は党首を加藤高明に諸会派と合同して憲政会を結成。以後、1924年の第一次加藤内閣が成立するまで約8年間、野党の時代が続く。

問J 積極または積極財政が正答でありが、意外と出てこない用語の代表。その具体的政策が、教育・交通通信・産業・国防に重点をおいた四大政綱。

## 【6】

予想配点	10/60 点	時間配分の目安	15/60 分
出題分野・テーマ	社会経済史・文化史 大正・昭和初期の社会経済と文化		
出題形式	正誤、記述		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：A 問B：C 問C：A 問D：A 問E：C 問F：A 問G：A 問H：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：夏期近現代史Ⅱ 1・3，12月期3・4回，冬期社会経済史Ⅱ 3回，1月期3回 センター：夏期近現代史Ⅱ 1・3，9月期2・3・4回，12月期2・3回，冬期社会経済史Ⅱ 3回		

### ●本大問の特徴・概要

商学部に多い第一次大戦以降の経済問題に、文化史をからめた問題。経済史的には、大戦勃発による好況の到来と終了後の経済破綻の要因を尋ね、文化史的には、同じ時期の都市を中心とした大衆文化の生活面を尋ねた問題。解答困難な問題はなく、オーソドックスに学んでおけば正答が出せる問題である。

### ●注目すべき小問

問B 上記した通り経済問題を説明する短い論述問題。本年度は、経済苦境とからめての、1920年代の貿易動向を説明する問題であった。三つの用語(「物価 貿易収支 国際競争力」)を使用することが条件なので、そちらから論理を展開するのも良い。「物価」は上昇傾向。その原因は、日銀券の増刷。「国際競争力」は低下。その原因は、物価上昇と産業界の再編を行なわないことによる企業の弱体化。貿易の動向、すなわち「貿易収支」は、入超傾向であった。これにつけ加えるならば、金輸出禁止による円為替相場の乱高下も貿易を不安定にしていた。40字に短縮する力が求められ、これが難しい。論理としては、日銀による非常貸出→物価上昇と国際競争力低下→貿易収支は入超が続いた。為替相場の不安定は字数を見てになる。

問E 乗合(自動車)とは、公共交通機関としてのバスである。乗合馬車や人力車などと競合したが、盲点となった人も多かったはず。しかし、他の説問D～Hで求められる、文化住宅・職業婦人・モガ・ちゃぶ(茶袱)台はこの時代の文化史・生活史では落としてはいけない必須事項である。